

日本語学会 2012 年度秋季大会シンポジウム報告

日時 2012 年 11 月 3 日 (土) 14 時～17 時

場所 富山大学 五福キャンパス 黒田講堂ホール

方言形成論の展開

パネリスト：大西拓一郎，澤村 美幸，西尾 純二，熊谷 康雄
司会：有元 光彦

1. 趣旨説明

(有元光彦・山口大学)

方言形成論とは、方言の形成過程、方言の多様性を究明する分野である。方言形成はおおまかに、①初期状態の(原始的な)言語(またはそれ以前の状態)から現在の言語への進化、②各地での自律的な方言の形成・発生、③中央語の地方への伝播、④伝播に伴う中央語と地方語との接触、(隣接)方言どうしの接触、⑤伝播・接触に伴う言語変化、といった時系列のプロセスを辿る。しかし、ここでは様々な通時的・共時的な言語現象が複雑に絡んでいる。また、語彙・音韻・文法など領域によっても、それぞれ異なる様相を呈している。

先行研究では、伝統的に②③を対象とするものが多い。例えば、「方言圏論」(柳田國男等)を嚆矢として、発生・伝播のメカニズムに関する様々な考え方が提出された。このような主に言語地理学的な観点からの研究は現在でも継続している。それに対し、近年では、④⑤に関する受け手側(地方)の論理や認知行動の研究が盛んになっている。また、周辺領域からの理論的サポートも見られる。①に焦点を当てた「進化言語学」も台頭しつつある。さらに、研究方法に関しては、伝統的な手法以外に、ネットワーク法、GIS、シミュレーション等の新しい方法も採られている。

本シンポジウムでは、現在まであまり注目されていなかった研究領域における報告を通して、新たな方言形成要因を記述するとともに、方言形成のメカニズムを解明し、方言形成理論を構築するための糸口を模索した。

2. 方言形成の要因・過程と分布の変化

(大西拓一郎・国立国語研究所)

地理空間上の言語差としての方言ができあがる要因・過程、言語変化に連動する分布変化を説明する理論、そしてそれらの背景にある社会ネットワークに関するモデルを考え、実際のデータをもとに検証を行った。すなわち、方言を用いる人間のいとなみに考えを及ぼしながら、言語の機能をもとに方言形成を考察するものである。

まず、方言形成の基本モデルを提示した。

人間は共同体を形成し、共同体内では共有の言語を用いて意思疎通を行う。しかし、その言語は必ず変化する性質を有する。このように言語は共通であることが求められるにも関わらず変化により共通状態から離れようとする矛盾した性質を抱えている。言語変化は、複数の共同体でいっせいに起こるわけではなく共同体ごとに発生に差がある。ここに方言形成の要因を求めた。共同体の存在と言語変化はいずれも一般事象である。言語に方言が存在することの普遍性がここから求められる。

発生した言語変化は共有性を達成するために共同体内に一気に拡大する必要がある。同時に共有性を維持するため、形成された状態は保持される。静穏状態の維持と変化の急速な拡大を方言形成の過程として考えた。

以上のモデルに対し、具体的なデータを利用しながら、世代差ならびに時間差に基づく方言分布の経年比較を行った。その結果、変化が発生する際には比較的短時間で共同体内に拡大すること、また、変化が起こらない場合には微細な差異まで含めて長期間にわたって分布が維持されることを確認した。以上を通して、基本モデルの妥当性を検証した。

次に方言の差異を引き起こす言語変化について考察した。言語変化には、均衡化・合理化に向かうという一定の方向性があることが知られている。言語には音韻・文法・語彙のような複数の部門が存在する。一つの部門の均衡化を目指した変化が他部門の均衡性を崩すことがある。そのために言語変化は終了することがないと考えられる。この点に関し、形容詞活用をもとに音韻変化が文法変化を引き起こす具体例を提示した。このような言語の各部門には、それぞれの性質に応じた変化の遅速の差異があり、それが分布にも反映すると考えられる。音韻・文法は変化が遅く分布は明瞭、語彙は変化が早く分布は曖昧であることを予測した。

最後に言語の共有性の基盤となる共同体について考察した。共同体を社会ネットワークに裏付けられた人間どうしの繋がり一般と考える。共同体は、表層的な「集落」と必ずしも同義ではない。集落は地理空間上の範囲が明瞭であるが、社会ネットワークを考慮した共同体は複合的かつ多様である。この多様性が個別の方言事象の分布の異なりを生み出すと考えられる。社会ネットワーク論で展開している「スモールワールド」と「弱い紐帯の強い力」に関する議論を参考にするなら、低次の紐帯で人間が広く繋がっていること、ならびに共同体外の持つ強い影響力が言語にどのように関与しているか考慮することが求められ、これらの点は方言形成を考える上での大きな課題である。

3. 感嘆表現の地域差と方言形成

(澤村美幸・和歌山大学)

今日の方言学では、音韻・アクセント・語彙・文法などの研究の充実ぶりに比べ、感動詞・感嘆表現といった分野は十分な研究がなされているとは言い難い。こうした現状

をふまえ、感嘆表現の地域差と、その方言形成について取り上げた。

初めに「痛みを感じた時に発する感嘆表現（以下、「痛み」）」についての方言分布図を事例として、西日本では形容詞語幹の「イタ」という形式を用いるのに対し、東日本では「イタイ」という終止形を用いるという点で、非常に顕著な東西対立が認められること、さらに、感動詞「ア」が形容詞に前接し、さらには一語化していく過程が分布にも反映されるという特徴が見受けられることを紹介した。

このような「語幹と終止形」という東西対立は他の形容詞を用いた感嘆表現にも見られるのかや、感動詞の前接や一語化といった問題を中心に、新たな事例の検討を行った。使用したのは東北大学方言研究センター（代表：小林隆）で 2009 年度に行われた全国感動詞調査の結果であり、前述の「痛み」同様に知覚・判断に関わる 4 つの項目（「暑さ」「熱さ」「辛さ」「汚さ」）の調査結果を利用した。

まず、形容詞語幹と終止形の東西対立については、上記の 4 つの項目にすべて当てはまらず、東西対立とは言い難いものが多い。どちらかといえば、これら感嘆表現の地図はむしろ終止形が外側、語幹形が内側という ABA 分布をなすようにも見え、言語地理学的には終止形が古く、新たに語幹形が広まったという解釈もありうる。しかし、この問題に関してはさらに事例を重ねた検討が必要である。

また、感動詞の前接や一語化といった特徴は、4 つの項目についてはさほど見られなかったが、これらの項目ではそもそも感動詞が前接するか否かについて項目ごとに異なることがわかった。これは感嘆表現を引き出す刺激そのものの種類や強弱の違いによるものであり、感動詞の前接の有無は、地域によって差が出るのではなく、感嘆表現を用いる場面や状況によって違いが出る可能性があることが明らかになった。

さらに、「痛み」においては形容詞「イタイ」に由来する形式以外の回答は少なかったが、今回はこの点で項目ごとにかかなりの相違が見られた。このような結果が出た理由としては、感嘆表現を生じさせる刺激そのものとそれによって引き起こされる感覚が項目によって多岐に渡るものが多かったことが考えられる。

こうした新たな事例の分析から、感嘆表現の地域差すべてが単純に東西対立を描くものばかりではなく、むしろ ABA 分布として解釈できそうなものもあること、また、感動詞の前接や一語化といった問題は地域差という枠ではなく、むしろ言葉以前の刺激の問題が深く関わっている可能性があることなどが明らかになった。

最後に、今回利用したのは通信調査の結果であるが、各地の感動詞や感嘆表現体系を明らかにする記述調査についても、未だ十分な取り組みがなされているとは言い難い。こうした状況をふまえ、分布・記述ともにさらなる調査データの充実をはかることも、この分野の方言形成を解明する上で必要であることを述べ、本発表のまとめとしたい。

4. 日本語の方言形成と言語行動の多様性

(西尾純二・大阪府立大学)

方言形成の議論に、言語行動の地域差・社会差という多様性の問題は、どのように位置づけられるのか。また、どのような方法で言語行動の多様性は発見され、どのような研究の意義や展開が考えられるのか。

これらの論点について、発表でははじめに、関連する調査事例を紹介した。感謝・謝罪発話の記述式質問紙調査の結果、東北・関東・関西・九州のうち、東北では「ありがとう」などの定型表現の出現率が低い、相手の負担に言及することが少ないなどの地域差が見いだされた。また、近隣コミュニティとの接触度合（コミュニティ密着度）という観点からは、密着度が高い回答者ほど、定型表現の出現率が低いことを示した。さらに、居住地の都市性という観点からは、都市性が低い地域では、定型表現が少なく、相手の負担に注目する発話を回答する傾向などが見られた。

これら、地域的・社会的な言語行動の多様性は、言語記号の多様性ほど鮮明に表れるものではなく、10数%の出現率の違いに見いださざるを得ない場合があり、観察しにくい。その理由として、言語行動の選択の誤りは、言語形式の選択ほどは、意思疎通の成否自体に大きく影響しないこと。実現形態が非常に多様で、特定の実現形態を選択する義務性が低いため、個々の実現形態の出現率が分散することが考えられる。

また、言語形式の約束事は記号の共有についての約束事であるが、言語行動の約束事はその時代の地域や社会における、人々の関わり方についての約束事である。それゆえに、コミュニティ密着度や、居住地の都市性など、人々の関わり方のあり様の違いが、言語行動の多様性を形成する要因として注目されるが、その検証は数少ない。

このように、言語行動の多様性は、捉えにくいというのに、多様性を形成する要因についての研究も蓄積がない。このため、統計的手法を用いつつ、多様性を形成する要因を探索する方法での研究が望ましい。地域や世代など、言語形式で多様性が確認されている要因だけでは、言語行動の多様性は捉えきれない。

このような問題を乗り越え、日本における言語行動の多様性を明らかにする研究に、どのような展開が考えられるか。一つは方言を形成する一要因である地域社会の「言語的発想法」を明らかにすることにある。たとえば、挨拶ことばの地域差には、「定型性」を好むか好まないかという発想の地域差が現れる。この定型性をめぐる言語表現の地域差と今回の言語行動の定型性の地域差とは一致する。

この結果からは、言語行動の習慣が、言語表現や言語変種の形成に関与することが示唆される。また、都市差やコミュニティ差など、日本語では確認されにくい、ことばの社会的多様性についての議論も、言語行動では考察がなされやすい。その際、都市におけるコミュニケーションの希薄化などの社会問題をも指摘しうる。

言語行動の多様性は、コンテンポラリーな言語生活のあり方を相対化し、時空間に位

置づけることで、言語研究としての意義を見いだせる。そして、現代社会の言語生活の問題点をも指摘しうるのである。

5. 方法から方言形成論を再考する

(熊谷康雄・国立国語研究所)

方言形成の古典的議論などを方法論的な視点から読み直したい。シミュレーションという方法を中心に、実験的思考、ネットワーク的な考え方も参照しつつ、方言形成論における概念、モデル、仮定、推論、操作などについて考え議論を深めたい。

シミュレーションは予測、事象の理解、新しい知識の獲得などに役立つが、方言研究ではまだ少ない。方言形成にとって根本的である個と個の相互作用を直接モデル化できるものとして、セルオートマトンやエージェントベースシミュレーション (ABS) がある。ミクロな個体間の相互作用がマクロな状態を生み出すという考え方に立つ。方言形成にとって興味深い拡散と領域形成の2つの実例を示した。一つはランダムウォークで、独立した個体のランダムな動きにより、部分から全体への拡散が生じている。いま一つは ABS による領域形成である。より似ているもの間では相手の要素を受け入れる確率がより高くなるというルール (相手への同化) だけで、ランダムな状態から出発し、似たもの同士が作る空間的な領域ができあがる。

単純な相互作用の原理だけで、ランダムな状態から出発して空間的パターンが出現するが、Daniel Nettle (*Linguistic Diversity*. Oxford: Oxford University Press. 1999) は、これでは多様性は減少するだけで多様性の起源について説明していないとし、言語的多様性 (方言) の発生のシミュレーションを行った。7×7の格子上の各格子に各々20人 (5年齢層) の個体からなるグループを置いた人工社会において、不完全な学習 (ランダムなノイズ) を言語的な変種の源とするモデルを作成し、言語的な多様性の発達に関するシミュレーションを行い、人口移動のある状況下で言語的多様性が発達する上での社会的選択の重要性を示している。発表ではシミュレーションによる研究の進め方の例として、Nettle (1999) のシミュレーションの再現実験の結果を示しながらこの議論の過程を示した。

榎垣実 (「方言孤立変遷論をめぐって」『言語生活』24号, 筑摩書房, 1953) は、方言圏論は方言の成立を説明するものだろうからとして、方言孤立変遷論の「金田一春彦の結果論」に対して原因論の立場を強調し、圏論と孤立変遷論をまとめた全体のメカニズムを提示しているものと読める。しかし、要因間の関係から導かれる結果を追跡するのは概念的な議論だけでは難しい。

榎垣と Nettle を突き合せた。Nettle の一連のシミュレーションでは、語彙の多様性の出現には、音韻に比べて社会的選択が不可欠で、より強い「ノイズ」が必要になる。これは方言孤立変遷論における音韻と語彙の挙動の違いに直接的ではないが対応させて考えられ、社会的選択、人口移動、「ノイズ」の関係の中に、孤立変遷論の語彙は変化せず、音韻に変化が見られるという観察に対応する領域が見いだせる。

Nettle と楳垣の突き合せから、シミュレーションは事象への理解を深め、周圏論や孤立変遷論をより一般的な問題の中に位置づけ得ることが見えてくる。また、日本の方言形成の議論の中で問題になっていることを、シミュレーション研究と突き合わせると、ここでは焦点の当たっていなかった課題も見えてくる。

6. ディスカッション

(有元光彦)

フロアからの質問として、まず大西氏に対しては、伝播の停滞と一気の拡大というモデルに関するものがあった。ここでは、「共同体」というものをどのように捉えるかがキーとなっている。大西氏の「共同体」には、広い範囲のものから狭い範囲のものまで様々なレベルのものがあり、一人の人間はいくつかの共同体に属していると考えている。澤村氏に対しては、データが終止形であるかどうかの認定の問題、調査方法に関する問題が投げかけられた。特に後者については、通信調査よりも実地調査（全集落調査）の方がいいのではないかと聞いた質問であったが、この点について澤村氏は、本研究は体系性を問う調査ではないこと、結果的に差異が観察されたことから、現時点では妥当であったとの応答があった。さらに、いくら質問文を作っても本当に話者の内省を引き出すことができるのかという課題についてもコメントがあった。この点については、西尾氏からも応答があり、実地調査にしても調査者が誰であるかとか、質問の際にどのような刺激を与えるかといった調査者側の影響があるため、多様なアプローチが必要である旨が述べられた。また、各地の言語行動の多様性を探る際には、様々な変数が関連するため、変数を探索的に調査する必要性も主張された。熊谷氏に対しては、シミュレーションにおける初期状態の問題、社会ネットワークと移住との関連に関する質問があった。これに対して、シミュレーションでは、自由に設定を変更して実験することができ、様々な仮説を検証していくことができるという主張が述べられた。

終盤では、各パネリストが現時点で構想している研究対象・方法論等についてコメントした。大西氏は、モデル構築を推進し、全国という広い地域で見たときに、このモデルがどのように検証されるかという課題に重点を置いている。様々なレベルを対象としたプロジェクトを展開している。澤村氏は、理論的基盤の整備をし、特に方法論を吟味していくことを考えている。対象の拡大、多様な視点の必要性についてもコメントがあった。西尾氏は、言語行動と言語記号・表現形式との関連性を追究していくことに興味を持っている。表現形式上どのように現れるかという点は見逃すことのできない問題である。熊谷氏は、シミュレーション研究自体が新しい研究領域であるため、種々の言葉の変化を捉えていきたいと考えている。

方言形成論は、まだ熟していない研究領域である。現時点でやれることは、方言形成を意識したデータの緻密な収集であることは間違いないだろう。

(企画：有元光彦，橋本行洋)